

2010年度 専門演習

後期テキスト課題レポート

2011年3月
メディア社会学科
是永ゼミ

2011/01/31

立教大学 社会学部メディア社会学科

3年 08DE001D 相原 駿

おしゃべりの拡大による「私的領域の維持・肥大化」

今日における公的領域と私的領域の関係において、人びとのその形成に大きく影響を与えつつあるツールとしてインターネットは無視できない。匿名性を特徴としたインターネットは、最近ではアカウント・システムにより半匿名、場合によっては非匿名（＝実名登録により実在者とネットアカウントが完全に一致）を特徴とするサービスも多くの人びとに利用されており、また、より更新頻度の高いリアルタイムとしての特性を備えたサービスの台頭も目立ってきた。

そうした、匿名－非匿名、リアルタイム－ライトタイムという様々な立場、時間差を性質とするインターネット空間は、果たして不特定多数が集まる公共空間に為りえているのだろうか。本レポートでは、特に日本の若者を中心にユーザー同士のコミュニケーションを主な目的に利用される mixi や Twitter といった SNS サイトを事例にとりあげ、今日の日本のインターネット空間と私的領域について考察してみたい。

まず mixi や Twitter の特徴として、半匿名、もしくは非匿名（実名登録）であることと、比較的更新頻度が高いリアルタイム性が挙げられる。そして、特に昨今の多くのユーザーの発信情報は、そういった実在情報、実時間に則した「つぶやき」と称されるものになってきている。例えば、何を見た、どこに行った、仕事、テストが思わしくなかった、交通災害に巻き込まれたというようなものだ。これは本来、というよりそうした SNS の出現前は学校、家庭、友人同士の集いの場という比較的プライベートな対面空間において行われていた「おしゃべり」そのものである。つまり現状においては、SNS というインターネット空間は“対面から延長した私的空間としてのしゃべり場”という性質が色濃い。

その一方で、今日のネットだからこそ、このおしゃべりという情報の受信－発信が成立したその背景も確認することができる。「ネオ・デジタルネイティブの誕生」において著者、橋元良明氏は「若者は「オンタイム」にこだわります。(略) 友達のリアル、すなわちオンタイムな近況を確認するためのサービスとして、ツイッターは発展をとげた」(p.153 「ネオ・デジタルネイティブの誕生」(参考文献)より引用)と述べている。こうした若者の受信行為は“リアルな状況を知りたい”という心理にもとづいたものであるのは確かである。ただ、ここでその心理的背景について、なぜそんなに“知りたい”と思うのだろうかを考えてみたい。なぜならば、そうしてそこでその若者が知りえる情報の多くが、直接自分に向けたものではなく、また自分の生活に直接的に影響を与えるものではないからだ。

そこで考えられるのが、若者が得たいのは「リアルな状況」という“情報”そのものではなく、その情報を知りえているというその“ステータス＝状況”ではないだろうか。つまり、“知らない世界を知りたい”という情報欲求ではなく、“周囲のステータスを把握することで、自分の居場所を確認したい”という極めて個人的かつ内向きな欲求があると考えられるのである。その証拠に、それら情報の多くは、私的領域向けであり、公共空間的においては無益な、また無益とは言わなくても必要ではない情報なのである。ゆえに、「その情報を知りたい」のではなく、知っている自分を得たい、つまるところはその知っている自分によってその私的領域内（現実、インターネット問わず）における居場所を確保しておきたいのである。

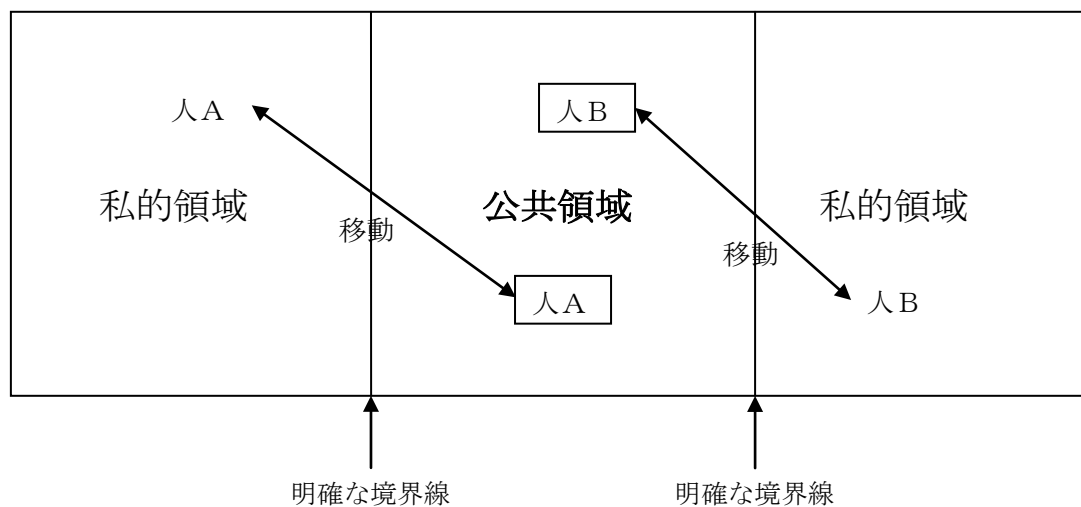
他方、情報の発信においては、半匿名＝「自分の私的領域内では非匿名、公的領域においては匿名」という状況で、“だれ”にではなくインターネットという“空間”に向けて発信する。ここで重要なのは、公的領域においては匿名＝透明（＝不可視）、私的領域内においては非匿名＝非透明（＝可視）ということだ。“その時間”に“その情報”を“私”が発信することに意味をもつのである。そしてここで発信される情報も、公共的には不可視＝無益（に等しい）な情報であり、極めて内部に向けた情報である。こうした情報発信もまた、受信と同様な個人の孤立に対する心理状況が働いているように考えられる。

結論として、日本の特に若者のインターネットにおいては、公共領域の構築ではなく、コミュニティからの孤立の回避、私的領域の維持といった面での私的領域の拡大が顕著にみえる。それは、そもそもインターネット空間が私的領域の一部としての居場所となっていることに加え、その居場所が私的領域の一部ゆえにそれへの固執、その喪失への不安を常に抱いているからである。ソネットが唱えるように「コミュニティの維持そのものが目的」（p.363「公共性の喪失」（参考文献）より引用）であり、そこに属するすべての人間が追放し、また追放されることを畏れている。

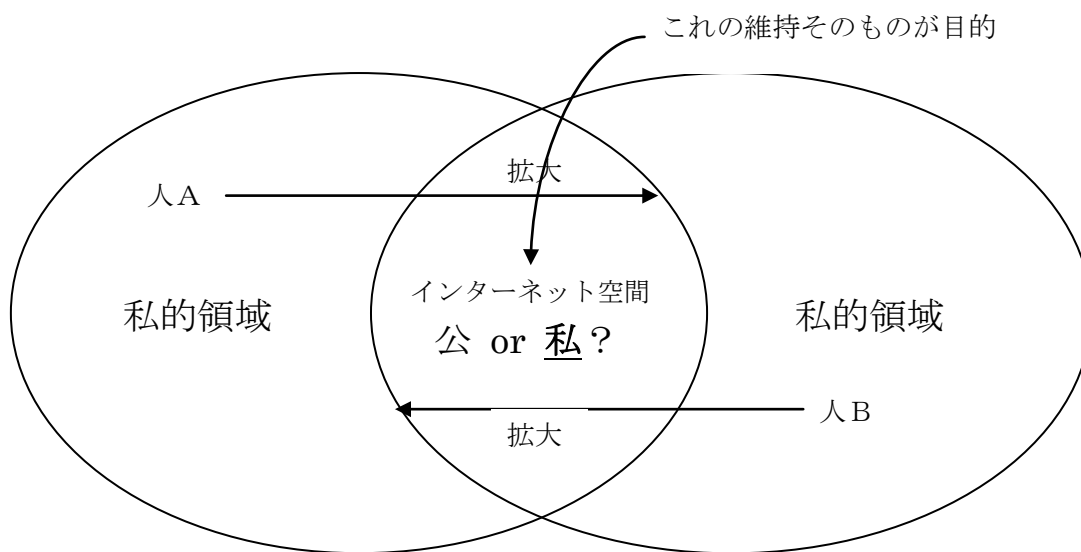
公共空間と私的領域において本レポートで考察を試みたのは、日本のそれも若者がメインに創るインターネット空間という非常に狭い領域ではあるが、その背景には、もちろん現実世界でのコミュニティ（＝本来公共領域であるはずの私的領域）の肥大化があることもまた認識できる。こと日本の若者にとっては、私的領域的コミュニティこそが孤立から免れる場所であり、その確保、維持こそが目的である。そうしたリースマンの唱えるところの極めて内部指向型に傾いているのが認められるのではないだろうか。

そしてまた、結局のところ開かれたインターネット空間において、公共空間は個人によっては構築されず、日本の現状においてはマスメディアによる参入にみられるように、マスによる空間形成が一つの特徴にもなっている。

図：近代前



図：インターネット空間、また近現代



参考文献

- ・ 著：リチャード・セネット 「公共性の喪失」／晶文社／1995年1月10日（五刷）
- ・ 著：橋元良明 他 「ネオ・デジタルネイティブの誕生」／ダイヤモンド社／2010年3月18日

資本主義市場社会への国家の介入という展開により、既成概念が崩され、公共的活動が矮小化される。私的領域が拡大しているのは事実だが、日本と欧米では、公共性の意味合いが異なる。

日本には、もともと「世間」という概念があり、日本において、公共性に似た働きをしている。公共性は、住民の所有権などの制限をおこなうような力をもつ。同様に「世間体」とか「世間の目」という言葉は、「世間」が、私たちの行動を監視し規制する力をもっていることを示している。問題なのは、「世間」は世間のうちの人間に対して相互に「配慮」しあい「優しい関係」をつくるが、「世間」の外の人間は、人間だとは思わないという本質をもっていることだ。

つまり、世間は、「世間」の内にいる者を「身内」とよび大切にすが、外にいるものを「赤の他人」とよび排除する。公共性という概念が「世間」に似ているのは、ある種の社会的強制力をもつからである。しかし「世間」が公共性と異なるのは、「世間」が常に内と外という区別を行い、「世間」の内部の原理が外まで及ばないことである。

日本には「旅の恥はかきすて」という格言があるが、これこそ、自分の「世間」の外の領域では、「世間」がみていないので、タガがはずれて「なにをしてもいい」ということを意味する。若い女性が、電車のなかで他人の目もかまわずに化粧するのが非難されているが、「世間」とは自分が所属するグループのことだけで、まわりの人間に対しては「世間体」も「世間の目」もなくなってしまうので、不思議ではない。

公共性と「世間」が異なるのは、公共性には内と外との区別が存在しないことである。つまり公共性概念は、すべての「世間」に横断的に通用する原理としてある。いいかえれば、公共性概念に「外部」は存在しない。しかし日本では、複数の「世間」に横断的に通用するような倫理・道徳が存在しない。日本の私的領域の拡大には、このような背景があるように思う。

さらに私的領域の拡大を促した要因として、電子メディアがある。電話は、最初はまずどここの家庭でも玄関などに置かれ、その次に応接間におかれる。そしてリビングルーム、個室と移り、さらには携帯電話のように身体そのものに直接装着されていく。もともと電話というものは声として他人が入ってくるものなので、玄関や応接間のような他人を迎え入れる空間に最初は置かれた。いってしまえば電話はよそ者を入れる場所であるから、一番プライベートな領域とパブリックな外側の領域とを分ける場所に置かれていた。ところが、電話は今では個室にあたり、身体に直接に装着されている。つまり、個人のプライバシーの中心になるところに、いきなり玄関が開いているようなものである。携帯電話は、どこにいても他人につながる穴のように見える。つまり、電話を用いた関係は、他人が自己の自己性の根拠になる一番プライベートな、私的な場所に直接入ってくるコミュニケーションになっている。インターネットを考えると、事態はますます明瞭となる。インターネットでは、ホームページを開設したり、他のホームページに自由に入出入りすること

ができる。ホームページは、まさに比喩的に名前が示しているように「ホーム」であり、自分の固有なプライベートな領域である。プライベートな領域を外にさらし、他人が勝手に入ってきて拒まないという構造になっている。

遠くの疎遠なものが、一番プライベートなところに入ってくる、他者的なものが自己の領域に入ってくるという構造は、電子メディアが可能にした。厳密に言えば、電子メディアなものの開発と普及を促した欲望のうちに仕組まれていたのではないかと考える。このような電子メディアによって私たちはどこにいても相手と繋がれ、自律性を保ちながら他者と自在にネットワークを組むことができる。電子メディアによって現代社会が変容していくというよりも、電子メディアは社会の変容していく様子を具現化してみせる存在である。こうして私たちは世間とより密接にかかわるようになり、その外部での振る舞いはどんどん悪化していく。かつては新聞でも大きく取り上げられたウォークマンの音漏れも、今ではほとんど話題にならなくなったように、今後私的領域の拡大によるマナーの問題は、沈静化されてしまうのではないかと危惧している。

私的領域の肥大化

是永ゼミ3年 塩飽美久 (08DE077R)

「関係は親しい (close) と同時に閉ざされている (closed)。」ーリチャード・セネット氏は、人々がコミュニケーションを取っていく中で育まれる“親密性”について、著書¹でこのように指摘している。今日、他人と親密さを深めることは絶対的に善であり、人間関係を熟成させ、個人を発展させるものであるという認識が広がっている。そして悪、つまり犯罪や無秩序といったことは、親密性を欠いた人や場所に帰納されるのだ。しかし、友人や家族に恵まれ、親密性がいつも身近にあることが絶対的に美德と言えるのだろうか？

私は今回、“私的領域”という言葉をも“自分と他者との関わり”という意味で捉え、セネット氏の持論やその他参考文献からヒントを得ながら論じていきたいと思う。

セネット氏によると、現在人々が私生活 (private) において求めるものは原理や秩序ではなく、自分自身がどういった人間なのか、自分は何をやりたいのかを追究することだという。そして、そこでは自分自身とだけいること、家族や親しい友人たちとだけ居ることそれ自体を、ひとつの目的とすることに努めてきたのだ。その目的を達成するならば、現代は非常に適している環境だと言えるだろう。携帯電話という極めて個人的で私的なデバイスが老若男女に普及し、インターネット上では大小様々なコミュニティが存在し、人と人とのコミュニケーションが手軽でたやすいものになったからである。しかし、そのように他の世界と繋がりやすい環境にいるにも関わらず、なぜ人々は“私的領域”を広げるのではなく狭め、そこでだけの親密性を高めようとするのだろうか。セネット氏はこうも述べている。「各々の自我が、本人の最大の重荷となっている。自分を知ることは世界を知る手段ではなく、目的になってしまっている。」(P17) このように、とにかく自分を知ることだけに固執してしまうがために、個性とは一体何なのかを自分や他人に明確に説明することが非常に困難になるのだ。知っている人々の中で、自分を否定されずに過ごしたい。自分でもわからない自分を、他人がわかってくれるものか。このような心理が、人々の親密性を閉ざされたものにしていくのではないだろうか。

こうして“私的領域”を左右に広げるのではなく、上下に深める考え方が広まることによって、自分が属するコミュニティの人々に対する信頼性や興味が非常に低くなるという懸念が挙げられる。つまり、属するコミュニティ内ではお互いをさらけ出し信頼し合うのが常であると信じることで、全くの他人に対して抵抗感や敵対意識を持つようになるということである。そうして、日常生活において他人のプライバシーを尊重するといった、人間として基本的な意識の低下につながるのである。よく駅や電車内でマナー遵守をうながすポスターやアナウンスに気付くが、同じ空間にいる人間への思いやりを考えるならば、わざわざ警告しなくても良いことばかりである。(車内での化粧・携帯電話や音楽プレーヤー使用時の騒音・座席の過度な占有等。) また、いわゆる“ご近所トラブル”でも同じよう

なことが言える。住居という“私的領域”を、全くの他人から騒音や荷物等で侵入されることに非常に敏感なのである。また逆の立場から見ると、「ちょっと位大丈夫だろう」という意識で近隣に迷惑をかけるパターンも考えられる。これらは全て、人々の“私的領域”から、全くの他人を思いやる意識が欠如しているということがわかる事例である。

次に、全くの他人を“私的領域”から排除し、領域内で親密性を深めすぎることにも問題点があるということに触れておきたい。そこでは、もし関係が変わるか、変わらざるをえない時に、信頼が裏切られたという感情が伴うからである。つまり、そこだけで尊敬や相互理解が安定していると思込みすぎることで、ちょっとしたトラブルだけで溝が出来、関係に終止符が打たれる可能性があるのである。これについてセネット氏は「安定の期待を負った親密さは感情のコミュニケーション—元来困難なものであるが—をさらにいっそう困難にする。」(P362)と述べている。

橋元良明は、著書ⁱⁱで「デジタルネイティブにとって、ネットは地球全体の人々とやりとりをするための玄関、あるいは国際線の搭乗口のようなものです。ネオ・デジタルネイティブにとってのネットは、もっともっと近接したエリアとつながるための小窓です。」

(P175)と、現在小学生～中学生の“ネオ・デジタルネイティブ世代”についてこう述べている。彼らにとって、SNSやブログなど、いつでもどこでも友達と一緒に居ると錯覚出来る方法が普通であり重要なのである。これからの未来を担っていく世代は、ますます内の世界の親密性を高めていくことに夢中になるという指摘と捉えていいだろう。“私的領域の肥大化”、この言葉から私がイメージするものは、人がずっと同じ場所に座り続け、そこで携帯やパソコンといった外の世界と繋がるデバイスに釘付けになりながらブクブクと太っていく姿だ。人々が自分自身を見つめすぎるが故に内向的になり、他人への意識を欠いてしまう未来を“個人化”と呼ぶのは危機感が無さ過ぎるのではないだろうか。今後、“私的領域”は肥大化ではなく、多岐化することが重要だと提言したい。多岐化することで人々の視野や価値観が広がり、他人を思いやるという根本的な人間性が育つと考えられるからである。

i リチャード・セネット (1991)「公共生の喪失」北山克彦・高階悟訳、晶文社

ii 橋元良明 (2010)「ネオ・デジタルネイティブの誕生」ダイヤモンド社

携帯ゲーム機の発達による私的空間の肥大化

昨今、携帯電話の普及はもとより、ソニーの「PSP」をはじめとする携帯ゲーム機の進化と普及が目覚ましい。2010年度（2010年1月4日～2011年1月2日）の売上総数は、ソニーの「PSP」（PSP go含む）が2,907,120台、任天堂の「DS」（DS Lite、DSi、DSi LL合計）が2,871,618台と合わせて年間約600万台近い携帯ゲーム機が販売されている（※1）。これは家庭に据え置くタイプのソニー「PS3」や任天堂「Wii」の販売台数を上回っており、この携帯ゲーム機の普及が私的空間の肥大化に何かしらの影響を与えているのではないかと考えた。

かつてテレビゲームはステレオタイプの子ども玩具として考えられていたが、現在では幅広い世代にユーザーが存在し、ゲーム機の性能向上にともない、様々な形態でゲームを楽しむようになっている（※2）。家庭で据え置きゲーム機をテレビに繋げて遊んでいたように、主に私的空間で用いられていたゲーム機が、今では外出先で容易に楽しめる携帯性を持ち、一般に広く利用されるようになった。実際、通勤電車のなかでPSPを利用するサラリーマンをよく見かける。

しかしながら、公共の空間でゲームに集中する姿には釈然としない。イヤホンを使用し、他人には迷惑をかけていないのだが、スーツを着たサラリーマンが電車内までゲームに勤しむというのは滑稽に感じるし、社会人としての品格に問題があると感じる。山田真茂留氏の『〈普通〉という希望』の中でも取り上げられている、電車内で化粧を施す女性と同じ立場である。

もちろん大人に限った問題ではない。私がかつて見かけた光景として、地元北海道に帰省し、函館へ旅行した際の出来事がある。宿泊先のホテルに到着すると、ロビーに観光客らしき家族がいたのだが、その一家の子ども2人は旅先にも関わらず携帯ゲームに熱中していた。せっかくの旅行なのにもったいないなあ、という思いと、親はなぜ注意しないのだろうか、と感じた覚えがある。

公共の空間におけるゲーム機の利用は「私的空間の肥大化」であり、社会で「普通」となってしまうことのひとつではないかと考える。今回のテーマについて考える上で私にとっては「普通」ではなく、社会的に「普通」となっているものを考えた結果がこの携帯ゲーム機の利用であった。

大人がテレビゲームなんてみともない、旅先でまで携帯ゲームに熱中するなんてバカらしい、というステレオタイプがなくなりつつある今、ゲーム機の利用が堂々と公的空間にまで及んでよいのだろうか。しかし、それらの問題は当人たちのモラル次第となってしまうのが悲しい。私自身、そういった人々に対し、電車内で注意することはないし、当人

の問題と考えてしまっているためだ。私に子どもができた場合、前述の観光客の一家の例から、子どもに携帯ゲーム機を買い与えないという意味を持つてはいるが、どうしても他人事という解釈で終わってしまう。他人に実害的な迷惑をかけなければ公的な空間で何をしても許されるという風潮は是正する必要がある。

リチャード・セネットは『公共性の喪失』のなかで、「公衆 (the public)」について述べており、「パブリック」という語が現代で使われている意味を取るようになったときには、それは家族と親しい友人たちの領域とは別にある社会生活の領分を意味したばかりではなく、この知人たちと見知らぬ人たちの公的な領域は、相対的に広い多様な人々を含んでいることを意味してもいたのだった、と公的空間について解説している。しかし、現代の日本における「パブリック」とは、自らの存在を知っている人物と共有する空間であり、山田氏が考える「公私反転」または「公私混同」の状態にある。

かつて地域の共同体が活発に機能していた時代には、地域社会の目は公衆の役目を果たしていた。近所の目が気になり、常識から逸脱した行為には及ぶことができず、一方でお互い監視されているという意識が苦しくなり、それらの社会を壊していった。また、大規模な集合住宅や交通機関の発達により、地域の住民という意識が薄れ、目的地までの空間は私生活に全く影響を持たないものとなった。地域社会がもつ効果は健全な公的空間の維持であった。

学校教育にもこうしたモラル教育は求められていこう。学校という公的な空間の中で、どこまでが許されるのかしっかりと学ばなくてはならない。むしろ、教育において学んでこなかった結果が今の公私反転や他人への無関心につながっている。

公的な空間を私的空間としっかりと区別するためには、親や学校からの教育による幼少期のモラル形成が重要となる。したがって、すでに社会を形成している人間は自らが社会を担っていると認識し、こうした行為を恥じ、より高尚な常識を身につけていく必要があるだろう。その上で、ゲームを行う時間を読書や思慮に用いていくべきである。

参考先

※1

株式会社メディアクリエイト

プレスリリース「PSPの年間販売台数、発売以来初めて僅差でトップに」

http://www.value-press.com/pressrelease.php?article_id=70868

※2

任天堂株式会社

<http://www.nintendo.co.jp/ir/library/events/090508/05.html>

公共性の喪失は、私的領域の肥大化によって失われたのか。

若者がオレ様化している。数々のマナーやモラルは低下し、若者は以前より自己中心的になったといわれている。自分たちの周りの人間やコミュニティに対しての親密性や重要性はこれまで以上になっている半面で、それ以外の赤の他人等に対して冷ややかなまなざしを向けるようになっている。

そうした快樂主義は未来への展望を持たないゆえの刹那的快樂主義と、最大公約数的に心地いい感覚のみ求める功利主義に基づいている。

そうした個々人の私的領域の肥大化が、公共性を失わせたというのは間違いではないだろう。空気を重んじる極端なまでにコミュニティの人間を気にする性質は、そのままその外部に居る他者への無関心へとつながっている。

人間は、他人がルールを破れば破るほど、同じように自制心を失っていくという性質を持っている。ルールの崩壊は、それ以上の意味を伴って集団の中に浸透していく。

しかしセネットによれば、我々はかつての都市的な空間などを復活させることによって連帯を可能であるという説もある。それは果たして可能だろうか。

かつてと決定的に異なるものを、我々は知っている。インターネットである。

インターネットによる電子空間が全ての人間をつなぐようになって、我々の間には孤独と断絶が横たわっている。

ただしそこにもまた無限に並列的であるからこそ、それ以上の力を発揮できないとも言える。

カリスマが生まれにくいとも言えるだろう。人を必死に駆り立てるのに、理性だけで解くのは誤りではないか、と。それと同時に、個人が自身のアイデンティティを集合の中で突き詰めようとするほど、自身を喪失する状態にも陥りかねないのではないか。

サイバースペースから広がるコミュニティの多様化と都市空間の断絶。こうした状態から、人間のコミュニティ自身も想像力における存在になるのも無理はなく、物質性や空間性を超越した「空気」とコミュニティは同化する。

ただし同様にそのコミュニティに対する信頼の環の厚みは増してきている。

インターネットやツイッターなどの功利性や役割は、マスメディアと対立的、あるいは並列的にしばし扱われる。政治にまつわる議論やムーブメントの火付け役、煽り役としての働きを持つものとして、社会への大きな影響を期待される存在となるからだ。

アイデンティティを自己の同一性、と語るかはあやしいのではないだろうか。それは個性の探求という言葉に結びつき、むしろ、「自分が他人とはどう違うか」という相対的な役割で使われるべき言葉なのではないだろうか。

しかし人々が共有する空間として以上に、インターネットは人々の精神に対して働きかけ

る。

サイバースペースやメディアで映し出されてきた言葉や行動はコードに分解され、ありとあらゆるものはファッションの一部となった。

また歴史を紐とけば、敗戦からの軍国主義への批判が全体主義への批判的スタンスとつながり、学生運動の鎮静化は社会運動への関心を削ぎ落した。

そしてイベント化・商業化した祭事は宗教への熱意も失わせ、日々のニュースで聞こえる互いへの非難や叱責の声は、大人たちへの尊敬さえ失わせた。

こうして現在の社会像に対しての批判や疑問を呈する行為でさえ、ある種の決まりごとのようになっている。

しかし私的領域を肥大化させる以外に、果たして我々には何が出来たのだろうか。

情報化と既視感、世のあらゆるものから唯一性と独自性を奪われた世代の耳年増にしてしまう。そうした老化リズムとでもいおうものと付き合う最善の策があるとするならば、それこそ身体感覚を開けたものにする事だろう。

現在の状態は、ある意味で当然と言えるのではないだろうか。全ての善悪が曖昧に、普遍的ルールを持たないという意識を持ち続ける現代の若者にとって、それはある種のニヒリズムとともにしみついた眼差しである。

しかしながら、またこうとも考えられる。

自己言及的かつ内省的な面を持つ人間が、今後とも同様の問題意識を共有し続ければ、そこからの逸脱を行おうとするのではないだろうか、と。

ただしそれがセネットらが求める解決として受け入れられるかは別だろうが。こうした

今日、「公的」と「私的」という区別が稔然としない状況が存在していることを第一に指摘しておく。

19世紀において「パブリック」とは誰が詮索してもよいということであり、「プライベート」とは家族あるいは友人に限定された、生活の保護された領域のことを意味した（セネット,1991）そうであるが、ポストモダンの時代で既存の文化や制度が大きく揺らいだことによる人々の思想の影響、そして後のモバイルメディアの普及といった様々な社会的要因から公と私の関係は変化していき、今日においては「私的領域の肥大化」は進んでいると示唆されている。

「私的領域の拡大」という点を考察する前に、まず現代社会における公的・私的領域の混同化について、論じていきたい。私はモバイル端末の普及が、公的・私的領域の混同化を加速させてしまった一因であると考ええる。

現代の日本人が電車の中でする行為の第一位は読書ではなく、「携帯電話」であるそうだ。電車に乗る多くの方は、友人とメール、Webサイトを閲覧、またSNSサイトで交流を図るといった外部接触行為をし、電車という公共空間の中でも私的な外部接触が絶えることがほとんどない。つまり、モバイル端末の登場並びに普及が、公的領域においても私的領域を持ち出すことを可能にしたのだ。それゆえ生活空間の中で、私的領域が公的領域を浸食していることから、私的領域の肥大化は徐々に発生したと考えられる。こうして、公的領域と私的領域の境界が曖昧になっている社会が現時点で存在していることは確かな事実なのだ。

歴史的に見て、公と私の境界線はあったのだろうか。セネットによると、17世紀におけるそれは礼儀の要求と自然の要求が釣り合ったところだと定義している。礼儀の要求とはコスモポリタニックなパブリックの振る舞いといったところで、自然の要求とは家族内での振る舞いといったところであろうか。当時、どちらか一方の要求を選ぶことを拒んで、両方を平衡状態に保ったところに、この時代の両者の複雑性は語られるのだが、18世紀終わりにおいて新しい国家産業資本主義の勃発や都市化に裏付けられるように、公と私の観念は根本的に変化していく。産業主義の台頭により、旧制度的に見られた公的秩序が支持されなくなったかわりに私生活中心化の波が起き、都市化がこれまでの文化や生活を空虚なものに変えていった。こうして公と私のバランスは崩壊していったのだ。また、公と私のバランスが崩壊していった状態は、あまりにも流動的で不安定なため、自己を何かにつなぎ止めようとする力学がはたらくことになる。しかし、その何かを外的な制度や文化に求めるのは難しいので、頼る先は結局のところ自分自身ということにならざるをえない（山田,1962）という葛藤を生んだ一因であろう。そのため、現代の人々はその不安的さを一人で乗り切るとはなかなか容易ではないため、群衆や集団といったものを希求しているの

だ。

アンソニー・ギデنزは、後期近代社会に特徴的に立ち現れる親密な交わりを「純粋な関係性」と呼び（山田,1962）、外的なしがらみとは一線を画して、本人たちの私的な関心だけに基づいている関係性に注目した。文化的支柱がなくなったために、それを礎にしてきた諸々の関係性が危機に瀕する一方で、この自前の関係性は新たな可能性にすら感じられた。しかし、この関係性は外的な文化や制度に頼らないという意味で「純粋」なだけであり、この親密性が主として寂しさを紛らわすためならば、それは「不純」である。こういった点から見ると、今日における親密性はナルシズムに過ぎない。ナルシズムとは自己が満たされることの追求である。上記で携帯電話は公的領域の中に私的領域を持ちこむと述べたが、その持ち込んだ私的空間でのやりとりの中身というのは対して重要ではないと考えられている。やりとりを通して「繋がっている」という感覚を得ることの方が重要なのである。この「繋がっている」という感覚、すなわちナルシズムが現代社会において蔓延しており、同時に他人との関係性に重点を置くのではなく、各人の自我意識のために関わり合いをもつという、なんとも自己主義な関係性を構築してしまっている。

私的領域の肥大化とはナルシズム主義の追求の結果である。歴史的変化を考慮するとナルシズム主義に陥るのは仕方がないようなことであると感じるが、現代における私的領域の肥大化は、ただの私利の暴走であると考ええる。既存の文化や制度が揺らいだ中で、＜普通＞や＜常識＞が見えなくなった今、確かに私利の範囲は掴みどころがないし、公共領域・私的領域を区切ることは不可能であるが、だからといって私的領域の肥大化を放置することは問題である。何度も言うが、私的領域の肥大化はナルシズム主義によるものであり、その背景には自分の居場所を確保することを目的とするのに、各人がナルシズム主義に陥るばかりに他者と関係性をもつことができなくなる危険があるからだ。そうなっていくと、現代で語られる親密性はいずれ腐敗していき、現代人は今度こそ「孤独」を味わう羽目になるであろう。

「公共性」という言葉をここ数年、耳にすることが増えてきた。「公共性」という言葉が入った題名の本などもよく目にするようになった。この、「公共性」とは一般的にはヨーロッパ社会において誕生した概念を指すことが多いと言われている。「公共性」という概念が人々に広まるきっかけとなったのが「公共性の構造転換」である。著者であるユルゲン・ハーバーマスのによると、ヨーロッパ社会において18世紀中頃カフェやサロンを舞台に「文芸的な公共圏」として現れた。「宮廷や教会など旧来の公的・精神的権威に対抗して、また、生産や消費の必要性からも解放された空間にあって、表現の自由を標榜する全くの私人（市民）による自律的な領域」を形成したと言われている。後にフランス革命などの影響もあり言論や出版、集会の自由を主とした市民層の要求と結び付き政治的意味を強く帯びるようになっていった。「公共性」は、ヨーロッパ近代で育まれた啓蒙の理念を現すものとして強く意識されるようになった。古代ギリシアのアテネでは、都市、ポリスは国家を表し、公論を競う場所であったといわれている。ポリスとは、共に活動し、語り合う場所という意味で「公共性」の空間として存在した。しかし、近代都市はそうした要素を捨て去り、積極的に私的領域を拡大していく。それは管理、制御するための行政機構の充実を進めることになる。人々が自由を満喫したいという欲望を満たすため「公共」はその欲望をコントロールする役割を担う。そして、都市はその方向に進んだ都市は、「公共性」を喪失した非ポリスの空間となった。

現代の社会で「公共性」という言葉は一般に次の三つの意味に当てはまると考えられている。公的なものという意味、特定の誰かではなくすべての人びとに関係する共通のものという意味、誰に対しても開かれているという意味の三つである。

日本では憲法に謳われている基本的人権に制限を与える「公共の福祉」は、表現の自由やプライバシーの保護に関する調整でしばしば焦点になることがある。いずれも、特定の個人に優先される権利などに対して「公共」という言葉が使われたのである。明治時代頃から「公」とは天皇を頂点とする国家官僚制のことを表し、「公益」とは国家利益のことを指してきた。現在でも「公」と「私」という使い分けは日本ではよく見られる例なのではないかと考えられる。「公」は、民である「私」と上下関係を形成している。第二次世界大戦後、民主化によってこういった体制は形式的には崩壊したといわれているが、政治や行政、組織にはこの図式が色濃く残っている。こういったことは日本特有の公共性観である。また「公共事業」といわれる土建屋仕事に対して、国や自治体が市民に理解を求める際に使用されていた。このことなどから「公共性」を国家が独占しているという認識が生まれたと考えられる。60年代末以降、公共事業を含む政府の「公共政策」に対して、住民運動、市民運動という形での抗議が提起されてきた。それが、90年代初頭、バブル崩壊後に国家の財政破綻が露になると、「公共性」に対する批判的な問題意識は広く一般に共

有されるようになったといわれている。他方、ボランティア団体、NPO、NGO といった市民による活動が、「市民的公共性」の生成に貢献し、「公共性」は国家が独占するものから、市民の側へと領域を広げていったのである。けれども1930年代の世界大恐慌により政府の権限が増大し私的領域への介入が肥大化した。そして公共政策を通じて市民生活の安定と福祉の向上への仕組みが拡大し「市民的公共性」も後退していったとされている。

今回のテキストとして使われた「普通という希望」にも多々出てきた若者の電車の中で
のマナーなどについてももう一度考えてみた。電車内での化粧やコンビニ、駅構内、電車の中と、所かまわずベタッと座り込むという例があげられる。最近では特にめずらしい光景ではないように感じる。けれどもこれは電車の中が、公共的空間が、自分の部屋と化していると考えられる。その他にも、給食費を払わない、モンスターペアレントと呼ばれる理不尽な要求を教師、学校につきつける親、車中に子どもを置きざりにしてパチンコに興じる親の出現など、事件、事故につながるような公的空間での問題も多く起きている。しかしそんな事は「気にならない」と感じている人々がいるというのも事実である。携帯は、「情報」としては意味のない、単に繋がっていることを確認するためだけに使われていると考えられる。電車の中で化粧をすることをどう思うかということについては「電車の中で会った人とまた会うことはないから」や「自分に関係ある人がしていることではないから」といった意見などから私的領域と公的領域を上手く切り換えられず、公的領域を拒絶して私的領域から出られなくなっているというのではないかと考えられる。ここ最近の問題は本来公的領域であるべきところに私的領域を持ち込んでしまうというのが特徴的であると感じた

「公共性」というものが時代や社会背景に伴って変わっていくのは当たり前のことなのかもしれないが、「公共性」というのが誰のため、何のためにあるのかということを考えていくことが必要だと思った。

参考文献

「人間の条件」 ちくま学芸文庫 ハンナ・アレント

「公共性」 岩波書店 齋藤純一

第1部においてセネットはこう述べている。

18世紀の首都の市民たちは公的生活が何であるか、また何でないか、の双方の範囲を明らかにしようと試み、パブリックとプライベートの線引きは、本質的に礼儀の要求（コスモポリタンのパブリックの振る舞い）が自然の要求（家族）と釣り合ったところだった。どちらか一方ではなく、双方の平衡状態を求めた。これは、見知らぬ人たちと感情的に満たされながらもなお離れたままに振る舞うことが、人間を社会的存在に変える手段として見いだされ、代わって親子関係や深い友人関係が人間の創造したものというよりも自然の可能性と見られるようになったということであり、つまり人は公の場で自分を作るのであり、私的領域については自分の自然な姿を実現するということである。

この部分では、「公的空間＝自分を作る、私的空間＝自分を開放する」という文脈だが、現代人、特に若者においてはこの原理が成り立っていないのではないかと考え、この部分を参考にしながら私は現代における私的領域の拡大について述べようと思う。

「＜普通＞という希望（山田真茂留著）」において電車内などの公共空間にて化粧をする若者たちに触れている。この中で「車内化粧が気になるか？」という学生に対して取ったアンケートが紹介されていた。「学校や会社といった公共の場にいるならば、同じ学校・同じ会社という社会に属するものとして恥ずかしいかもしれないが、電車の中にはそういった意識もない。ましてや家族や友人でもないのだから気にする必要はない。」という意見だ。これは先述した公的空間と私的空間の原理とは逆の公私反転ともいえる意見である。つまりこの公私反転行為者たちにとっては私的な場では考慮しあうものの、公的な場では放縦の極みという意識である。

セネットの「公共性の喪失」では、19世紀には人々は意志と無関係に性格が露見することに対して防衛機制をかけ、自分が注目されないように、自分の性格を他人に読ませないように努めた。それは私的な感情と公的な表現間の境が消えかかってしまい統制する意志の力が及ばなくなったヴィクトリア朝最盛期の、衣服や話し方が個性を露見させてしまうという考え方に因るもので、19世紀中ごろになると、公的空間において見知らぬ人たちは互いに話しかける権利はない、各人は公的な権利として放っておかれる権利を所有しているという考え方が育った、とも述べられている。

以上から考えると、現代人における公私反転行為者には一種の正当性も見られる。すなわち、公的空間とは極端に個別化された世界であり、ある意味私的空間とも呼べ、だからこそ車内化粧は他人に関知される行為ではないということだ。しかしこれは公的空間に対して私的領域が大きく侵害している状況であり、自らをひどく重視し、他者を一切勘案しないといった極端な態度に陥ってしまったのは、当人たちにとっても、また周りの人間たちにとってもよいことではなく、人迷惑以外の何物でもないのは明らかである。

そして、情報ネットワーク時代に生まれた若者はそのような態度に陥りかねない。それにはインターネット文化の発達が要因として挙げられる。インターネットは諸個人が自律性を保ちながら他者と自在にネットワークを築ける便利なツールだが、そのネットワークの中心は常に自分であり、常に主人公である。そのインターネット接触が日常化した若者たちが、数多大勢の主人公たちと自分を同等視せず、自分だけがすごいという感覚に陥りやすいからだ。

このように私的領域が肥大化してしまった背景には制度的・文化的な轍から離れたポストモダン的な自己は自らをいかにでも構築できるために状況によってさまざまな多面的な自己開示が可能になったことが挙げられる。多面的自己は流動的かつ不安定なため、自己をなにかにつなぎとめようとする力が働く。この際に外的な制度や文化に求めるのが困難なため自分自身、個我の有する感覚に委ねられることになった。この自己の多元性から再帰性に移行したポストモダン状況は個我にとつてもない負荷をかけている。

こうした状況を脱するためには、自己をつなぎとめる力に応え得る制度や文化などの存在が必要であろう。多面的な自己とは、自らが属す様々なコミュニティごとに自己を使い分けることだが、自己という一見唯一的なものが“多面的”という状況に陥った理由にはコミュニケーション様式の変化があるだろう。選択的に同質的な友人、またコミュニティを作っていく現代の若者は大いに私的空間を広げていく。一方で公的空間は狭まっていく。しかし彼らにとって私的空間では同質性にとられるあまり本来自分を開放する場であるにもかかわらず自分を作り、一方で本来自分を作るべき公的空間において自分を開放してしまっているのが、車内化粧する若者に表されている若者像のように思える。

以上のように考えると、私的領域の肥大化による公的空間への侵害は明らかに起きている。しかし、セネットのいう18世紀の欧米における本来的な公私の意味合い、つまり「人は公の場で自分を作るのであり、私的領域については自分の自然な姿を実現する」ことは現代において、特に若者文化においては逆転してしまっており、それはコミュニケーション様式の変化によるものであると考えられる。

単に私的領域の肥大化という問題よりも、その私的領域自体の定義が変容してしまっているため、若者たちが自己をつなぎとめる際に頼るべき存在が個我しかないことから個別化が一層促進されてしまうのではないかと、そしてこの促進は公的・私的空間の存在すらなくし、“個人的”という空間の蔓延した、社会性の欠如した社会が構築されてしまう危険もあるのではないかと私は考える。そしてこの危険を解消するには、公的・私的、公共性・親密性という境をしっかりと認識できるような人間関係の構築が必要であり、両者が平衡的なある種18世紀の欧米首都の市民たちが試みたパブリックとプライベートの線引きを、現代の日本に合った形で行っていくことが手段として挙げられるのではないかと私は結論する。

リチャード・セネットは、アウグストゥス死後のローマ社会の危機と現在の生活の間には、公的な生活と私的な生活の均衡にかかわるものにおいて、似たところがあるという。(p15)しかし、ローマという過去と現在では、私生活の意味が異なる。私の場においてローマ人たちは、公的なものに対置するべき別の原理を宗教に求めたが、現在求めるものは、原理ではなく内省である。私的事であること、自分自身とだけいること、家族や親しい友人とのみいることそれ自体を一つの目的とすることに努めてきた。

リースマンは、アメリカ社会や西ヨーロッパが、内部指向型から、他人指向型の状態に移りつつあると考えた。しかしこの順序は逆にすべきものとセネットは述べている。人々は、非個人的な意味のコードによってのみ適当に扱える公的な事柄を個人的な感情によって処理しようとしている。(p18)

公的領域への個性の侵入は、ナルシシズムと破壊的ゲマインシャフトへの道を開くことにもなる。集団的個性によって形成されたコミュニティの範囲が狭くなるほどに、友愛的感情の経験はいっそう破壊的になる。よそ者や似ていない者は遠ざけるべき人間になり、コミュニティが共有する個性の特徴はさらに排他的になる。

しかし、都市を設計し直して、お互いの顔が見える小規模なコミュニティを復活させようとする試みは間違っているとセネットは述べる。(p408)確かに、親しい人々によって構成されたコミュニティの中で、人々は「本来の自分」を取り戻し、人間らしい生活に「復帰」できるように思われる。だが、小さな人間集団においても、個々人の自信のなさが完全に解消されるわけではない。逆に、ゲゼルシャフトでなくゲマインシャフトを求めようとする衝動は共同体の一員であり続けたいという強迫観念を生み出し、コミュニティ内における相互監視の強化、コミュニティの外に対する排除をもたらしているのである。

親密さとは、普通の生活における一つの専制的支配である。(p468)自信を喪失した人々は、現在、親密さにあふれた暖かな私的領域へと逃避している。人々が公的領域に関心を持つのは、それが個性を持つ時だけである。親密さとは、ひとつの限られた視野であり、人間関係によせる期待である。しかし、人々は近づけば近づくほど、人間関係は社交性の乏しいものになる。親密な接触によって、社交性にもたらされる失敗は、人間性の条件が、「個性」と呼ぶ、個人的な、不安定な、そして自己にとらえられた事象へ変えられてしまったということだ。(p469)高度に発展した資本主義社会に見合う大規模なコミュニティの実現は幻想でしかない。(p.470)にもかかわらず、人々が公的領域への個性の侵入を許してしまったために、彼らは権力の現実について理解できなくなり、現状の問題が放置されてしまったのであった。今、私たちが思い出すべきことは、人々は未知のものとの出会う過程を通じてのみ成長するということだ、とセネットは述べる。

日本においても、既存の文化や制度が揺らいでしまったことにより、「公」の領域を大き

く侵害し、「私」の領域が肥大化している。さらに、個人の発達、日本において急速に発達した原因としては、インターネット文化も考えられる。個我を中心とした「純粋な関係性」が嗜好的に展開される場としてインターネット文化は、自分だけがすごいという自我肥大の原因にもなっている。

現代人は「人間関係において「コミュニケーション」が大事だと言うが、何をコミュニケーションすべきかについては適切に考えることができていない」というのはベラーらによる痛烈な批判だが、これこそ嗜癖的な関係の実相にちがいない。嗜癖の対象と化した親密性で大切なのは、コミュニケーションの中身やその質などではなく、誰かと一緒にいて話をすることを通じて調達される安心感なのである。（山田真茂留「〈普通〉という希望」第4章「私」の専制」 p112）

ここでいわれている親密性というのは、アンソニー・ギデンズのいう「純粋な関係性」のことである。「純粋な関係性」というのは、外的なしがらみ抜きとは関係なく、趣味や興味だけで強かに繋がる人間関係のことだと著者はいつている。そして、それが嗜癖の対象になりやすいことを問題にしている。現代人の多くが親密性を希求しているのは、実は失われし文化を補おうとしているからである。（p110）コミュニケーションの中身ではなく、コミュニケーションそれ自体からもたらされる安心感だけを目的とすることを問題としている。しかし、実際にはコミュニケーションの中身と、それによってもたらされる安心感の両方を得ようとしているのではないだろうか。けれども、当の親密な交わりが自らのみを拠り所とするようになることは、外的と内的の区別を作り出し、外的な支えのない当人たちの思いだけで成り立つ関係をつくり、それを様々な物事に当てはめて考えるようになることすれば危険である。

参考文献

リチャード・セネット『公共性の喪失』（北山克彦・高階悟訳、晶文社、1991年）

山田真茂留『〈普通〉という希望』第4章「私」の専制」2009年

私的領域の肥大化について、テキストを読んだ上での私の考察は、この問題は一口に私的領域が肥大化していると決め付けてしまって良いのだろうかということである。むしろ、現代において私的領域とも公的領域とも言えない曖昧な領域が出現したことにより、公的な領域においての儀礼的無関心を活用しなければならなくなってしまったことが私的領域の肥大化と呼ばれるようになってしまったのではないだろうかと考えた。

上記のように考える過程にあたり、まず始めに現代人は私的領域で自分の自然の姿を実現することができなくなってきたのではないかと考えた。テキストの38ページに書かれているように、本来私的領域とは『自分の自然の姿を実現する』場である。しかし現代においては、私的領域に属するだろう友人や彼氏に会う時にでも「スッピンでは会えない」と考えている人が少なくないだろう。化粧をした自分というのは言い換えれば作った自分であり、自然な姿ではない。だからと言って、友人や彼氏といった親密な間柄の人間が私的領域に属さないということは考えにくいだろう。だとするならば、私的領域内での自分の表現方法が変化した、または私的領域そのものが変化したと考えることが妥当だろう。これは私的領域の場が家族などの個人対個人から個人対複数または複数対複数のコミュニティーへと変化していったのではないだろうかと考えることができる。この考えはテキストの410ページにある『局地的な狭い地域を道徳的に神聖なものにする』という一文から、個人にとってコミュニティーが神聖なものへと変化しているのだろうと推測することができる。さらにテキストの370ページに『集团的個性によって形成されたコミュニティーの範囲が狭くなる』や同408ページの『小規模なコミュニティーを信じる考えがますます強力な理想になった』という文から、コミュニティーの範囲は時代を追うごとに狭くなり、また個人にとって重要なものへとなくなっていったのだろうと考えることができる。つまり、コミュニティーが私的領域の中に入り込んでいき、現在では自分の属するコミュニティー＝私的領域となっているのではないだろうか。

上記のようにコミュニティーの場が私的領域へと変化していき、自然な姿を実現しにくくなったにも関わらず、個人がコミュニティーを重要視する背景には、公の場は道徳的に劣った場であるという以前から存在した考えも関係しているのではないだろうか。テキストの38ページ『公的生活を道徳的に劣ったものと見た』や、同44ページの『一種の道徳上の捨ておかれた場所』という文章から、19世紀から既に公的領域は道徳的に劣った場であったことがわかる。このような劣った領域において自分をさらけ出すことはしたくないというような心理が働いているのではないだろうか。

公的領域においてこのような潜在意識が人間には存在していて、私的領域は時代と共に自分の自然の姿を実現する場ではなくなりつつある。さらに複雑なことに、現代においてはこの2つに属さない曖昧な人間関係も存在しているのではないだろうか。この曖昧な人間関係を作り出している要因のひとつが現代のネットワーク社会であると私は考える。インターネットの誕生により人々は以前よりも交流の幅が広がった。交流の幅が広がったことにより、いわゆる顔見知りや知人が増加した。この顔見知りや知人という存在は私的領域

にも入れず、だからと言って挨拶などは交わすので公的領域の人間でもない。このような関係の人が増加したことにより、人々は私的領域に属する人だけでなく曖昧な関係の人々にも気を配らなくてはいけなくなったのではないだろうか。もちろん、インターネットが誕生する以前も知人や顔見知りには存在した。しかしその数はインターネットがある現在よりも少なく、また今よりも関係は希薄だったのではないだろうか。現代においては曖昧な関係の人とでも、例えば SNS サイトで友達登録をすれば自分や相手の動向がある程度は把握できてしまう。このようなことはインターネットが誕生する以前にあったとは考え難い。ゆえに現代人は気を配る相手やコミュニティーが以前よりも増加しているのである。

このような現状から、人々は私的領域でも自分を演出しなければならなくなったしそれ以外の領域以外の人々のことも考慮しなくてはいけなくなった。ゆえに、以前から道徳的に劣っていると感じていた公的な場で、テキストの 48 ページに書かれているような『公の場での沈黙』、『公的な権利としての見えない盾、放っておかれる権利』を最大限に駆使して、自分の属するコミュニティーでの立場を維持するため、または曖昧な関係の人々にも気を使うための自分を演出する様々な行為（具体例を挙げるとすれば、電車内での化粧などである）が私的領域の肥大化と呼ばれるようになったのではないだろうか。このような考えに至った時、昔から言われている意味での私的領域はむしろ縮小しているのではないだろうかというひとつの結論が導かれた。これが私の私的領域における肥大化についての考察である。

私的領域の肥大化

社会学部 メディア社会学科

2年A組 09DE013L

王 宇

ネオデジタルネイティブと言われる 96 世代のほとんどは、将来に期待していないという結果が出ている。これは社会に対する悲観的目線から来るものであることが予測される。現段階の社会問題を理解し、自分が世の中を変えるというより「社会の流れに寄りかかる」願望が強いため、社会からの特別な恩恵等を得られないと予測している。この問題を提起し悲観する子供に対して、大人だと感じてしまう。何故なら、公的領域への信頼がなくなるにつれ、自分の環境と戯れたりすることができなくなるからだ。若い世代だけでなく、自身を喪失した人々は、自由な私的領域へと逃避することになる。

インターネットの登場、普及により、外出することなく家のなかで公の場に情報を発信することが可能になった。つまり、私的な領域内から公的な領域内へ身体という物理的移動をせずに、不特定多数の者に対して情報を自由に発信することが可能となったということである。これによって、外出が公的な領域内への、反対に帰宅、自身の部屋への入室が私的な領域内への移動という区別が薄れたことになる。したがって、インターネットの登場、普及が私的領域と公的領域との区別をあいまいなものに変えたことになる。

何人でも一定の料金を支払って利用できることを考慮すると、インターネットは公的領域である。一般的に SNS やブログは「公的領域の私的利用」という形態だと考えられる。私的利用を許された領域でも、公的領域であるため、いつなときに誰（閲覧者やコメントター）が殺到し、「炎上」になっても不思議ではないし、またそれを止めることも極めて困難だと思われる。それでも近代の SNS、ブログ等が私的領域と思われる原因は、視聴、閲覧の制限を設けられるし、SNS の mixi 等に至っては、誰かからの紹介がないと閲覧すら出来ない私的利用が可能だからである。公的領域への私的介入が肥大化している証拠として、もう一つ挙げられるのは「主人公願望」と言えよう。人は公の場で、自分を作るのであり、私の領域において、自分の自然の姿を実現する。人々が出来るだけ目立たないように見せようと努めたのと同時に、劇場では個性がはっきり打ち出された。ネオデジタルネイティブ世代においても、自己が中心を占める主人公か感覚を味わえる自己表現手段を、インターネット上で確認することが出来る。例えばブログ、SNS の各種機能を活用しているときも、まさに公的領域への私的介入（主人公）となったときであり、このような公的領域への個性の侵入（私的領域の肥大化）は、ナルシズムと破壊的ゲマインシャフトへ突き進むことになる。個性そのものが反社会的観念になったように、集団の個性は集団的行為にそぐわぬ、集団的行為に移しがたい社会のなかの集団のアイデンティティになる。集団がかかわる処置は、他の人々と「似て」いない人々の排除と懲罰である。ここにおいての、「クレディビリティ」は、

公的なイメージに私的なイメージを重ねたものであり、当時のアメリカ大統領（フォード・R・フォード元大統領と思われる）が恥辱にまみれた前任者（リチャード・ニクソン元大統領と思われる）より、「誠実」で信頼がおけると思われていたのは、彼が朝食を自分で作るからだと言われている。日本でも同じような事例がある。自民党の麻生太郎元首相の就任時のときである。「漫画好き」という理由で若者から支持され、総裁、そして総理となった。両者ともに「私」と「似て」いる部分が重要だった。個人、集団、組織、国家などあらゆる水準で見られる「私」の領域の異常増殖。それは大きく「公」を侵害するまでになっている。

公的領域への個性の侵入を許してしまったために、権力の現状問題が放置されてしまった。人々が公的領域に興味を示すのは、その領域に個性を見出せるときになる。人々は個性を信頼できる候補者を選出することが望ましいが、高度に発展したブルジョワ生活に大規模な力を持ったコミュニティの登場はありえない。つまり、親密な規模での直接的な人間関係に対する信頼は、人々の権力の現実についての理解を政治的行動の指針へ切り替えることを妨げてきた。結果、支配する力ないし、不公平は問題にされないままになっていることになる。

環境こそが人々に公的領域を無意味なものとして考えさせるようにしむけているようではなく、都市が社会における自分たちの利益を追求できるように教える教師であるべきで、脅迫的衝動なしに人々と一緒になることが意味のあるフォーラムでなければならないのだ。

リチャード・セネットの「公共性の喪失」と山田真茂留の「〈普通〉という希望」の主張を
と、全学部共通カリキュラムの「スポーツと身体」を用いながら、「私的領域の肥大化」を
オタク文化のなかに見られることを挙げてゆく。

また、ここでは、「私的領域の肥大化」を、「他者と出会わない世界」だと考えている。これから挙げていく中間項の脱色と、読み手の多様な意味の生成は、この私的領域の肥大化のなかにも組み込まれていると考える。オタク文化においては、オタク文化がこのような性質をもっていること、またそのような性質をおたくが扱えること、お互いが相互に参照し合い、その内実を生み出しているということである。

マンガやアニメは時代とともに変化してきた。スポーツを題材としたマンガでは、60年代の主流は「巨人の星」「エースをねらえ」などの「スポ根」で、「向上することが重要」というイデオロギーを孕んでいた。70年代になると「ドカベン」など、イデオロギーから日常へ「スポ根」から「リアリズム」へと移り変わった。80年代は「タッチ」など、さらに日常へ近づいてゆき、マンガは徐々に「社会的上昇や勝ち負け」の意味が脱色されていった。東浩紀の三界論を用いれば、ここで脱色されているものは「象徴界（みんな・シンボル・社会）」で、「想像界（きみとぼく・感情）」と「現実界（世界・理念・夢）」の二極化、中間項の無い構図へと変化している。これは「サッカー日本代表を同じ国だから応援する」などというような行動原理にリアリティがなくなっていると言える。このマンガの構図は、リチャードの言うところの「公的なものに私的なものを重ねて理解しようとする」とことであり、山田の言うところの「個我中心の親密性」だと考えると、日常生活でわれわれは自分以外の人間を「他人（知らない、関わらない）」と「他己（知っている、関わる）」の二極に置いており、「他者（知らない、関わる）」の領域を排除していると言える。また、「象徴界」を、リチャードの指す「神々のいない現代」だと考えると、現代はこの脱色により「宗教的な儀式」をなくし「礼儀正しさ」と「不作法」を「親密な社会の構造」に組み込まねばならなくなったと考えられる。「新世紀エヴァンゲリオン」や「最終兵器彼女」など、主人公の行動がそのまま世界の様相に繋がるのが特徴とされる作品は「セカイ系」と称される。「セカイ系」の主人公は試練を乗り越え成長していくという構図が中心で、試練のなかで主人公は「世界」と「きみとぼく」を天秤にかけながら葛藤する。「セカイ系」は中間項「象徴界」の脱色を顕著に表しているオタク文化であると言えよう。

また、リチャードの言う「ナルシシズム」は、オタク文化の特徴であるメタ性にあてはめることが出来る。従来の文化の読み方の主流であった「作者の意図」や「作品のイデオロギー」的な読み方は薄れ、youtube やニコニコ動画の「コメント」、アニメの「声優」や「キャラ萌え」、AKB48 の「推しメン（多数いるメンバーのうち一人を応援する姿勢）」など、

「メタ視点」の文化とも言えるオタク文化は、読み手が文化の読み方を自らの興味や関心に基づいて次々と産み出している、つまり主観性そのものが目的となっていると言えるのではないだろうか。さらにメタ性は、近年のアニメ作品の特徴とも言える。そのメタ性とは、アニメのキャラクター自身がその作品の世界から抜け出し、現実の世界に言及するというものである。たとえば、「サザエさん」では、次回予告を主人公のサザエがする（「さ〜て、来週のサザエさんは？」）。これは本来、「サザエさん」という作品の世界、つまり二次元の世界のとして作品のなかで扱われている主人公が、次回予告では「自身がマンガのキャラクターである」性質を帯びながら同時に「三次元の世界に語りかける」ことを行っているのである。近年のアニメ作品では「らき☆すた」の主人公は「涼宮ハルヒの憂鬱」という作品のキャラクターのコスプレをする、つまり「らき☆すた」という世界の外の世界を持ち込んでおり、「オオカミさんと七人の仲間たち」では、作品そのものが有名な童話に基づいたキャラクターを基軸に展開されている（三次元の「童話」の参照）。これらの作品や読み手の「相互参照」の様相は、現代社会のコミュニケーションのそれと同様だと言えるだろう。このような作品の読み方がなされていること、またこのようなオタク文化があること、その文化の理解をそれに関わる人々ができることのなかに、「私的領域の肥大化」を見ることができ、また、オタクと呼ばれる人々は、「私的領域の肥大化」を自らの内に体現していると考えられる。

若者の自我肥大

09DE136M 矢野美樹

集合的な営みを回避し、ひたすら個人的・私的に文化的嗜好を追求する現代の若者たち。授業中は私語が飛び交い、電車内やオフィスでは女性が化粧をする。まるで自分の家であるかのように。近年、主にこのような若者たちにより公的空間が私的空間に侵略されている。日本と欧米では公的空間の意味合いが大きく異なるが、近代的な私的空間が拡大してきていることは欧米と同様である。

産業革命は、人々のライフスタイルを大きく変えた。産業革命は大量生産を可能にし、コストを下げることを可能にした。またそれまで学校教育という概念の少なかったヨーロッパ諸国において、工場という大組織で働くため、できるだけ同じ行動がとれる人間育成のため学校教育が普及する。これは日本がかつて学校教育が普及させた理由と同様であろう。

しかし、本来人間は、多様な価値・考えを持ち、多様な行動を取る生き物であると考えられる。だがコストと均一化の教育のため、無意識にライフスタイルを強制されてきたのである。例えば、本当であれば自分だけのオーダーメイドのスーツが欲しいところを、コストとそれにかかる時間を考えて既成品で済ませてしまう。このような均一化がこれまで世界で、もちろん日本でも起こってきた。

そして今日の高度情報化社会により、集団化・均一化の考えは見直され始め、個性教育の概念が出現した。それぞれの子供の個性に応じた教育を行い、個性を伸ばす。良い例として、運動会で順位をつけない学校が圧倒的に増えてきているという。足が速いのは個性である。しかし足が遅いことも個性であるという理由で、順位はつけないのだ。

日本において公的空間が崩壊し、私的空間が肥大しているのは主に若者。特にゆとり教育世代の若者であるといえる。本来人間が持っている多様性を取り戻し、個別的な親密性領域に力点を置き、自由な領域が拡大し、個人的趣味に没頭する。多様性、個性、自立性の尊重などの観点から見ると、実に望ましいことである。

しかし自分や、自分に身近な人の事しか大切にしない、という考えが、極端な態度に発展した場合、それは迷惑な行動であり、社会問題になる。

若者の自我が公共空間にまで及んできている。電車やバスなどの公共機関で平気で化粧をする女性。この行為が迷惑かといえば、実際直接的に他人に迷惑をかけている訳ではない。ではなぜ社会問題としてよく取り上げられるのであろうか。

「なぜ電車で化粧をしてはいけないのか」そう聞かれて納得できる回答ができる人は果たしてどれくらいいるのだろうか。絶対的な理由は無いにも関わらず、マナーとして当たり前のようにしてはいけない行為と考えられている。ほとんどの人は「品がない」「マナー、モラルの問題」「公共の場だから」などの曖昧な理由しか答えられないであろう。電車の中は私的空間とは区別されるべき公的空間である。人前で化粧をしない、というのは「マナ

一」であるが、人と会う時は化粧をする、というのもまた、女性にとっての「マナー」である。電車で化粧をする女の子たちは、納得できる理由がないから化粧をすることをやめないのであろう。

「〈普通〉という希望」の中でアンケートに回答した女子学生は「電車の中という空間は私のなかでは社会ではない」と答えている。電車の中は彼女にとって自分だけの空間であり、周りの乗客は空気のようなもので、全く気にならないのだ。授業中楽しそうにお喋りをする学生もまた、授業中というの自分だけの空間になっているのだろう。しかし一方で親しい人にすっぴんを見せることを恥ずかしく思ったりする事などから、私的空間と公的空間の意味合いが変わってきていることが分かる。自分と関わりのある人たちの前では恥ずかしい行為はできないが、赤の他人の前であれば全く気にしない。

情報社会の発達により、個人という人間の多様化・個性の重視・自由主義などの考えが生まれ、若者世代はその考えのもとに育ってきた。一見考えはこれらのポジティブに感じるが、多くの社会問題も出現し、論争されている。技術は進化し、社会的文脈も変わっていくにも関わらず、日本は法律がなかなか変わらない。憲法にいたっては65年も前のものである。新しい技術を受け入れる社会が完成していないような気がする。

私的領域の拡大は、長く今日の情報社会と向き合ってきた若者が作り出した新しい社会の形なのかもしれない。

専門演習テキスト班レポート

『私的領域の肥大化』

09de156p 中川浩司

今回のレポート作成にあたりリチャード・セネット著の『公共性の喪失』を読んだ結果、本書が書かれた 70 年代頃の欧米は、情報化社会の発展、近代文化の繁栄などと共に、個人個人の公共性が物理的・心理的に失われていた傾向にあったことが分かった。この傾向は日本国内にも共通点があるのだが、近代建築の象徴と言っても過言ではないニューヨークの摩天楼に建てられたビルを例に挙げると、全面ガラス張りの壁や装飾豊かな内装などから可視性の美学に基づき設計されていることがわかる。そのガラス張りの壁は内と外の区別を無くしているかのように見える。しかしそのビルの一階に設けられたホールのベンチに腰をおろしてみると、そのビルの内装の一部になったような妙な違和感に苛まれる。この妙な違和感はその他の階に通じるコンコースという位置づけを与えられたホールの機能によるからである。公共的であるはずの場所が、実際には公共空間としての機能を果たしていない 20 世紀における建築。この事象は近代の公共空間の死を象徴している。

本書によると欧米における近代的な意味で公共性が成立したのが、都市の急激な発展期にあたる 18 世紀半ばであるとされている。広場や公園、喫茶店などの公共的な機能を持った空間が都市に整備され、社会的にその存在が明確化された時期である。この時期の人々は完全なる赤の他人というものは存在せず、何らかの関係性を探し、自らと道行く人々を位置づけしようという強い欲求が存在していた。その関係性は服装や表情、立ち振る舞い、交友関係までに及び、町を歩くことが社交活動の一環であるような重要性を獲得した。しかしこのような時期は長くは続かず、百貨店や近代的格式を持った劇場などによって個人個人の個性は破壊され、自らの性格が露見されることを恐れるようになっていった。この個性・人格を表現する欲求はメディアやクチコミなどで名が知られている、今で言うカリスマ的な指導者へとベクトルが向いていく。政治家や芸術家の個性に陶醉し、自ずと支持し始めるようになった。

これらの個性に飢えた世の中を生み出した理由として、第一に資本主義の発展が挙げられるだろう。これまでの原初的なゲマインシャフトは資本主義・近代思想の登場により姿を消し、利益だけを追い求めるゲゼルシャフトが社会全体を覆った。しかし、この状況を危惧し、お互いの顔が見える様な都市設計に改善する試みは明らかに間違っているとセネットは本書の中で語っている。確かにこのような都市設計は個性を抑圧する圧力からも解放され「本来の自分」を取り戻せるように思われる。だが、小さな人間集団の中において言えば、個人個人の自信のなさが完全に解消されるわけではない。それとは逆にゲゼルシャフトでなくゲマインシャフトを求めようとする衝動は共同体の一員であり続けたいという強迫観念を生み出し、コミュニティ内における相互監視の強化、コミュニティの外に対する過激な排除をもたらしているのである。破壊的ゲマインシャフト、人類学の用語で言えば「擬似種形成」への危険がここに存在しているのだ。その結果、自信を失ってしまった

「個人」は親密さに満ち溢れた私的領域へと逃避している。本書は 1970 年代の欧米を対象に書かれたものだが、現在の日本で言えば、代表的なサブカルチャーとして知られている「オタク文化」、またはここ何年かで流行した mixi、GREE などの SNS がこの状況における代表的な例として挙げられるだろう。テレビやインターネット、携帯電話が普及したこの世の中では日本のどこにいて電子回線さえあれば他人とのコミュニケーションが可能になる。この能力を手に入れた人々は個人的空間にのみ入り込み、急激に私的空間を肥大させていった。しかし、この私的空間は前述したような公共空間を持たない空間ではない。それどころか親密さ（公共空間）を追い求めてネットの世界に足を踏み入れた結果、その行為自体が私的空間への停滞を生みだしてしまったように感じる。この傾向が強まった結果、ネットで知り合った、自分と同じ趣味や思考（私的領域）を持った人々と交流を持つようになり、その私的領域を共有しようとした。これがオタク文化の発展、SNS の流行に繋がるきっかけとなったのだろう。この行為は、この文章の前半に登場する 18 世紀半ばの欧米における都市発展期の行動に回帰している。

ゼミでも取り扱った『ネオ・デジタルネイティブの誕生 日本独自の進化を遂げるネット世代』から言えば、日本には PC・ネットが登場した時期と青年期が重なる 76 世代、モバイル機器の登場と関わりの深い 86 世代、そしてデバイスのモバイル化が進んだ 96 世代の 3 つのネット世代が存在する。この参考文献から今後の展開を予想するとすれば、急激な電子機器のモバイル化により私的領域は現在よりも大きくなるが、そのベクトルは現在よりも「ソト」に向かっていくように感じる。第四章「ネオ・デジタルネイティブとうまく付き合う」の内容に留意して考えると、ネオ・デジタルネイティブのツボとして「オンタイム」、「モバイル」が挙げられている通り、「ソト」の世界とほぼ同じ時間で流される USTREAM 等のオンタイム性の高い動画配信サービス、また、これまで屋内でしか使えなかった電子機器がモバイル化されることによって、「ソト」の世界に持ち運ぶことが可能になったデバイス等によって、我々の私的領域は「ソト」と密接な関わりを持つようになるだろう。

【参考文献】

橋元良明他著『ネオ・デジタルネイティブの誕生 日本独自の進化を遂げるネット世代』
ダイヤモンド社、2010

『公共性の喪失』を読み、セネットの「人間は自分たちが自分自身の性格の創造者であり、自分たちの生活のあらゆる出来事は自分自身を定義づけるという点から意味をもたなければいけないと信じるようになったが、この意味が何であるかは、彼らの生活の不安定さと矛盾のために言うことは難しかった。……徐々にこの自我という不思議で危険な力が社会関係を定義するようになった。」という記述などから、私的領域が公的領域にまで及んでいる要因として、自我の肥大化が関係しているのではないかと考える。著書で、ナルシズムの意味として、「この人物、あの出来事が、私にとって何を意味するかという強迫観念」とあり、まさに現代の人々は自意識が強く、自我の問題が各人の中で大きくなり、その為、社会と関与することが少なくなっているのではないだろうか。

『〈普通〉という希望』でも取り上げられていたが、自我が肥大化していることに、携帯電話の普及は大きく関係しているであろう。常に、誰かとつながっていることができる携帯電話で、さらに最近ではツイッターが流行し、これを一般の情報収集として使う人よりも、友達など、すでに関係をもっている人とのコミュニケーションに使っている人の方が多く、自分で簡単にリアルタイムに発信できるという形が多くの人々が利用しはじめた理由であろう。自分が何をしているか、自分が何を感じたか、自分にとって有益な言葉、全て自分が基準であり、自分のための言動である。その為、『〈普通〉という希望』でも例として出ていたが、電車のなかで化粧をするという行為も、自分が今したいことをしている、ただそれだけで、悪気などは全くないのである。また、電車内で化粧をしている人がいても気にならないと答えた人は、その人もまた、自分が中心であり、自分のエリアまで侵入される行為であれば気になるが、自分のエリア外の他人の行為であれば気にならない。このような考えは、最近の雑誌の特集の生まれ方にも見ることはできないのではないかと考えた。ファッションであったら、個性を強調する特集が多く、しかし、それが流行になってしまったら、多くの人々が同じものを身につけたり、同じような系統になってしまうことを、自分が中心にある人たちは気付かない。他にもダイエットや美容などが、以前よりも注目されていると感じる。これも、人々の自意識が過剰になった故ではないかと考える。

また、人との交流で、セネットの「人々は間に何かはっきりわかる障壁があればあるほどますます社会的になるのであり、それはちょうど、人々を集めることだけを唯一の目的とする特別の公共の場所を人々が必要とするのと同じことである。……人間は社会的になるためには他人から親しく観察されることからある距離を必要とする。親密な接触を増せば、社交性は減る。」という記述がある。これもまた、先の電車内の化粧についても言えるだろう。『〈普通〉という希望』では、公私の反転として書かれていたが、私も実体験でセネットの記述を感じたことがある。アルバイト中にお客さんとは普通に喋ることができたり、道が分からなくて歩いている人に道を聞くときはすんなり話しかけることができるの

に、アルバイトと一緒に働いている人たちとはなかなか上手く喋れず、これから長く付き合っていくであろう人とはなかなか親しくなるのに時間がかかることがある。公的空間に置かれているときの方が、自分をさらけ出すことができ、私的空間にいるときの方がかしまってしまうのは自分でも不思議だと思う。きっと私にとって、アルバイトをしているときに接するお客さんは、自分に何か影響を与えるわけでもない、意味のない存在として捉えていたのかもしれない。そう思うと、自分の私的領域が公的領域にまで及んでいることに気づいた。知らず知らずのうちに、自分の中で、自分という存在が大きくなり、こうして表れていることに少し恐ろしくなった。無意識のうちに自我が肥大化し、私的領域の肥大化につながっている。これは多くの人が気づいていない事実なのではないか。

これからさらに、各人の自我の肥大化が顕著になり、このような状態が続くとしたら、現在ですら消滅しかかっている公的領域はどうなるのであろうか。私的につくり上げられた各人の領域が再びまとまり、ひとつの新しい公的領域に成るのであろうか。それとも全くばらばらな個人、個人の領域に成ってしまうのか。今後の動向を考察していきたい。

専門演習2 テキスト班レポート課題

2011年1月31日

09de170n 太田真帆

リチャード・セネット『公共性の喪失』の中で、現代の社会は公的な生活を形式的な義務の問題とする点でローマ帝国が衰退の道を辿った時期に例えることができるという。しかし、過去と現在の異なる点として私生活の意味が挙げられている。現代の私たちが私の中で求めるのは公的なものに対置すべき別の原理ではなく、自分の心はどうかという内省なのである。現代の人々はかつてないほど自分独自の生活史と独自の感情に関心を持っている。

現代人の公的空間を虚無なものとして捨て去る傾向は、社会的環境も関係している。現在のオフィスというのは外側も内側も透過性の壁によって設計され、一つの広大なオープンスペースとなっている。それにより、オフィスの能率が上がるのは確かかもしれないが、それにより人々は孤立する。人間は間に何かはつきりとわかる障壁があればあるほど社交的になる。社交的になるためには他人から親しく観察されることからある距離を必要とするのだ。親密な接触を増やせば、社交性は減る。かつて日本などの東アジアにおいて、公は、私とは識別され聖なる領域となっており、聖なる公や公共のことを一般の人間が議論することは不遜なこととされていた。セネットの論じたような欧米のように法は一般人の秩序を担保するものではなく、東アジアでは礼的秩序が重んじられた。現在の日本の現状はというと、個人・関係・集団・組織・国家などあらゆる水準でみられる「私」の領域が異常に増殖しており、「公」の領域を大きく侵害するまでになっている。身近な具体例で言うと、私たちの移動手段となる電車やバスにおける並んでいる列への割り込み行為や、公共の場での化粧、さらには公共の場における子供の行動に対する親の甘い態度など、様々である。

こうした私と公の構図は、中国においてはどのような形であるのか。中国における「公」と「私」の伝統的なモデルは、個々の「私」に立脚したつながりとしての「公」という構造を持ち、かつ「天理」という超越的観念に支えられた倫理を内包している。この伝統的モデルは、現代の中国でも生きているといえる。日本で言う町内会・自治会に当たる中国の居民委員会は、一人暮らしの高齢者に対して行っている活動に、何か体に異変があった時などいざという時に備えて家の鍵を居民委員会が預かるというものがある。確かに、鍵があれば外から迅速に中に入り対応することができるが、日本では考えにくいことである。万が一に備えて親戚や子供が鍵を持っておくといったことは日本でも有り得るが、町内会で鍵を預かるという提案をしようものなら、プライバシーの侵害であるという批判が出るに違いないだろう。このように中国と日本の公共的事務を執り行っている組織では落差がある。中国においては「公」は道徳を体現し、それを「私」に対して提示することをため

らうことなく、また、「私」の側でもそれを当然と受け止めるという関係が成立しているのだ。また、プライバシーの保護のような、誰であろうと適用される形式的原則よりも、具体的な場面において、具体的にその人が「安全・安心」であることを目指すという実質的原則が優先している。

また、日本と中国の「公と私」の違いとして、日本では、公共の場で騒ぐことはほとんどないとされ、秩序も乱さない。だが、家に帰ると一転、大いに羽目はずすし、くつろぐ。一方中国では、公共の場は日本と逆の状態である。だが、家に帰ると途端に静かになり、家の中も整然と片付いているといわれる。中国においては公共の場はみんなでする場所で、一人一人に公平に与えられたものだから何をしても良く、交差点でも車の運転中でも自転車でも歩きでも、とにかく少しでもすきがあれば割り込んでいく。誰もがそうだから自分もそうしなければならず、公共道徳や社会的マナーなど捨てざるを得ない状況であるというのだ。中国において公共の場はまさに弱肉強食の世界で自分から勝ち取らなければ損をしてしまう。一方、日本では公共の場はみんなでする場所で、社会人として秩序やマナーは守らなければならない場という認識がある。交差点でも車の運転中でも自転車でも歩きでも、信号が黄色や赤になったら誰もが当たり前のように止まり、青になったら渡るといのように、公共道徳や社会的マナーなどとわざわざ意識することなく自然に行っている。また、駅の切符売り場でも、みな焦っているが割り込みすると周りから白い目で見られるため、そのようなことはせず譲り合いと協調を重要視している。

もちろん全ての日本人・中国人が各々上記のような性質を持っているとは断言できない。だがこのような「イメージ」が存在しているのは確かである。現在日本で問われている「私的領域の肥大化」はこの日本のイメージに反していて、中国的な要素持っているように思われる。しかし日本のこの問題の対象となる人々は中国に影響を受けたというよりは、やはり「＜普通＞という希望」でも述べられているように、一部の“オレ様”が目立っているだけであり、その他大勢の人々は彼らを好奇の目で見てに過ぎない。日本の「公と私」を考える際に、譲り合いと協調という特徴は、まだまだ健在であると考えられる。

私的領域の肥大化は、行き過ぎると公共性の崩壊を引き起こすという重大な問題を孕んでいる。そして、その私的領域の肥大化に伴う公共性の崩壊が起こっているのは、なにも日本に限ったことではない。個人に対しておおらかな考えをもつとイメージされる欧米においても、公共性は当然存在する。かつてのヨーロッパでは自分の身分・職業に相応しい服装でしか公の場所を歩けなかったり、都市でお互いに社会的であろうと俳優のように振る舞うパフォーマンスを強いられたりした。それは人々が公的な役割に従事していたためである。しかし、それは時代の変遷と共に、公的なイメージと私的なイメージの重ね合わせに防衛的になった人々により、公共の場では感情を抑制するという考え方が広まった。そのため、人々の公の場での行動は根本的に変わってしまった。公の場においては、沈黙こそ公的生活を経験することができる唯一の方法となった。

「公の場での沈黙」というのは、日本においても同じ現象がみられる。例を挙げれば、満員の電車内で他人と密着した状態になっても、お互いに相手の存在に気付いていないかのようなふりをするという、アンソニー・ギデンズの「儀礼的無関心」を貫くという行動はまさにこの表れであろう。

リチャード・セネットによると、アメリカのニューヨークにあるレヴァーハウスやイギリスのロンドンに建てられたブランズウィックセンター、国防センターといった公共空間は通り抜けるためのスペースであり、そこにいるところではない。こうした建造物の設計概念は輸送のテクノロジーとひとつになり、公共空間が移動の機能となるにつれて、それはそれ自体がもつ独立した経験的な意味をすべて失うことになる。この「孤立」は、①都市の高密度の建造物の中の住人や労働者は、当の建造物が置かれている環境とのいかなる関係をも感じることを禁じられている。②人が自らを個人の自動車の中に、移動の自由のために孤立させることができるようになるにつれて、人は周囲が自分の移動の目的のための手段として以外に意味をもつと信じなくなる。③公共の場所におけるいさかさらに容赦のない社会的孤立感があつて、それは他人の目に自分が見えていることから直接生み出される。という三つの意味を持つという。(リチャード・セネット『公共性の喪失』(北山克彦・高階悟訳、晶文社、1991年 P30-31))

この②というのは、日本において問題となっている電車内での化粧などといった公共機関でのマナー問題に関係していると考えられる。周囲の人々の存在を自己中心的な観点からでしか捉えられなくなることで、そこが例えば公共空間だとしても、「何をやっても気にしない」という態度に繋がるのだ。こうした「常識」の揺らぎが、現代の日本社会の問題点となっている。

また、日本においても欧米においても、こうした「孤立」化が進んでいるのは事実だろう。良い言い方をすれば「孤立」は「自立」であり、「個」として自分を高めるのに役立つ

だろうが、「孤立」が進むということは、社会が社会としてまわっていくためには不安要素が多すぎる。上述した日本の「常識」の揺らぎのような問題のように、社会という集団で私たちは存在する以上、「個」よりも優先すべきことは多いだろう。

こうして見ると、日本も欧米も共通点は多いだろうが、それは日本の欧米化が関係していると考えられる。かつて農耕民族として、村八分という言葉があったように、「個」の生活より「集団」としての生活が優先されてきた日本だが、近代になり、欧米文化が多く日本に取り入れられるようになり、日本人の考え方も欧米に近づいてきた。もちろんそれは良い点もたくさんあるが、その一方で弊害も生まれた。上述した「公の場での沈黙」も、人々が社会の中で「孤立」していく要因となっていると考えられる。人々が公での他人の行動に対して沈黙を貫くことで、②のような「孤立」を生み出してしまふ。

こうした公共性の崩壊、私的領域の肥大化は、様々な社会問題を生み出す。電車内での化粧や携帯電話の使用といったような公の場でのマナー違反の他にも、学校でのいじめというのも公共性の崩壊が関係すると私は考える。「公の場での沈黙」というのは、言い方を変えれば「見て見ぬふり」であり、いじめを生徒や教師が見て見ぬふりをしていじめがエスカレートしたというニュースを私は何度か見たことがある。また、いじめる側にとって、いじめという行為は、周囲のことを考えればできるものではない。これは私的領域の肥大化により、学校という「場」よりも自分の周りの「空気」にばかり目が行ってしまうため、いじめに繋がるのではないか。

公共性の崩壊、私的領域の肥大化は、社会を形作る上で大きな弊害となる。「東京砂漠」という言葉があるが、これは正に「孤立」した人々を指している。だからこそ、人と人とのコミュニケーションが希薄になっている現代では、田舎の温かみを感じるために、都会の人による農業や田舎でのボランティアが流行するのではないか。生きていく上で人と関わることは避けられないのだから、他人とのコミュニケーション能力を高める努力が、かつての公共性を取り戻す鍵だと私は考える。

はじめに

先日、ガーナに3週間一人旅をしてきた友人の話聞いた。その話の中で、彼はガーナから日本に帰って来たその日、自宅に向かう電車の中で違和感を覚えたという。その違和感というのは、その車両で彼以外のほぼ全員がイヤホンやヘッドホンで音楽を聞いている、もしくはゲームをしていたからだと言った。

「＜普通＞という希望」では電車内での化粧を議題のテーマの一つとして電車内におけるマナーに議論を進めていったが、彼が覚えた違和感のように誰も目を合わせず自分の好きな音楽を聞いて、あるいはゲームに没頭して、電車の中という公共の場であるのにも関わらず、皆がそれぞれ公共の場の中に「自分の世界」を作り上げて目的地に向かっていく光景。またさらに自宅では、ブログやSNS上で主人公を気取って、誰も欲しがっていない情報をひたすらに発信し続けている人々など「私的領域の肥大化」と関連して見られる行動は現代の様々な場面で見られる。いつから電車の中は音楽を聞くことや自分のある種の趣味の時間になったのだろうか。だがしかし、その一方で、彼の話を知っていると貧困に苦しんでいるガーナのような国の方ではこのような私的領域の肥大化は見られないようなのだ。ガーナで暮らす彼らも同じように音楽を好みよく聞くのだが、それはポータブルミュージックプレイヤーではなく一つのスピーカーから流れてくる大音量の音楽をみんなで聞き、踊るのだという。そして毎日「その一日」を生き抜くためにカカオ農園で働くのだ。「言葉は通じなくても楽しい時は彼らと笑う事が出来たし、顔を見るだけで感情がひしひしと伝わって来た」という話を聞いているだけで彼らのパワーを感じることが出来たのだが、逆にガーナの人たちに限らずとも他国の日本語が全くわからない人を日本に招いたとしたら、言葉が通じなくてもその人は今の日本でやっていけるだろうか。私はかなり難しいのではないかと思う。「公共性の喪失」で述べられているように日本人も『見知らぬ人とのやり取りはせいぜい良くて形式的で無乾燥なもの。』であるからだ。見知らぬ人に興味を持つ人はもはやマイノリティだといって良いだろう。では一体何が見知らぬ人を始め、近所付き合いなどにも興味を持たせなくなったか。それは戦後の「追いつけ追い越せ」の風潮の後に社会が独自性や個性を求めようになり、＜普通＞や＜常識＞が揺らぎを見せ、ついには自分の存在だけが信じられるという地点にまで立ち至ったということだ。自分だけは特別である、ユニークであるというナルシズムこそが自分の殻に籠ったままで他人に対して興味を示さなくなった要因だと私は考える。

「それぞれが自分の中にひきこもり、他の者たちすべての運命にたいして他人であるかのようにふるまう。彼にとっては自分の子供と良き友達だけが人類すべてなのである。仲間の市民とは交わるかもしれないが、彼らを見ていない。彼らに触れるかもしれないが、

彼らを感じてはいない。彼は自分自身の中にだけ、また自分自身のためだけに存在するのだ。もしこうしたあり方で彼の気持ちに家族の意識が残っているとすると、社会の意識はもはや残っていないのである。」と、冒頭で用いられているトクヴィルの言葉はまさに私的領域が肥大化してしまった今日の日本に当てはまる。自分の中に引きこもり、人類は友人と自分の子供だけという無意識の意識が公共の場を侵害し、授業中のおしゃべりや電車内での化粧を気にせず行わせるのだ。＜普通＞の＜常識＞が揺らぎ集団や群衆を欲する半面、必要としない他者には一切の関心を持たないというのは極端である。さらに私はインターネットなどのメディアが他者や未知な部分に対しての探求心を高めると同時に、検索後には疑似体験や既知感を生み出し、知ったつもりがそれ以上の探究心をくすぐらず、再び自分の中に閉じ込めナルシズムに浸るという悪循環のサイクルの一部でもあると考える。インターネットなどのインフラ技術がそのような私的領域の肥大化につながるのならばこれからも今まで普及していなかったガーナなどの貧困に苦しむ国々にネット技術が普及したとき、彼らもまた日本のように自分のからにこもってしまうだろうか。私は彼らが例えネット技術を手に入れ、疑似体験や既知感を味わうことになったとしても彼らの探究心は止むことはないと思う。むしろ彼らはネット技術を身につけたとしたら、世界中の音楽をダウンロードしてみんなで聞いて踊りだすのではないだろうか。やはり本来のネット技術は人類にとってプラス面での要素が大きいはずだ。しかし、使い方次第では情報を統制しようとする国が出てきたり、ネットでの疑似体験だけで満足して自分の殻にこもり国民としての絆が危ぶまれている国もある。また、日本の肥大した私的領域の治療が出来るのもネット技術だと私は思う。

インターネットの発達と私的領域の拡大

08DE116J

野口 大輔

現代の日本社会では「無縁社会」といった言葉がある。人と人とのつながりが減少している、人間関係が希薄化してしまっている地域社会を危惧する言葉である。地域社会の人間関係の希薄化、人と人とのつながりが減少しているならば、現代の日本人は「個人＝自分」の時間が増えているのであろうか。人々は個人の時間を大切にし、個人を理解し、個人を尊重する時代なのであろうか。

現代はなんといってもインターネットが発展した社会だ。ネット世代といわれる86世代、96世代（19886、1986年近くに生まれた者）にはコミュニケーションをネット中心メディアとして行っている者もいる。これらは伝統的にコミュニケーションの基本とされていた身体と身体を向かい合わせてのものではない。やはり現代人、特に若い世代においては人間関係の希薄化は進んでしまっているのであろうか。

人々のリアルな交流が盛んな時代はどうであったのだろうか。セネットは都市の急速な発展（18世紀後半）により、広場や公園といった多くの人が集まる公共性を帯びた空間ができたという。その公共空間において人は相手の服装や立ち振る舞い、使う言葉といったコードを読み取り、自分との差異でもって相手を理解した。同時に相手との差異は「自分」を理解することでもあったとしている。自分の地位を確認し、それに見合った立ち振る舞い、服装や言葉を使い、自身の役割を演じていたという。他人の存在、他人との関わりがあつてこそ自らを自覚していたという。そして、他人との共存を守るために公的な場で「自分＝個性」を出すことを抑圧していた。

現代のネット世代は前述したようにコミュニケーションを行うにはインターネットメディアをツールとしたものが中心となっている。連絡をメールなどで済ましてしまうように、簡易なコミュニケーションが盛んになっていることは確かである。しかも、それは親や学校の友人などといった、比較的近く親しい存在とばかり行っているものではないだろうか。人との関わり方は浅く、そして関わる範囲は狭くなっている。このコミュニケーションを重用することで人間関係は広がらない。

インターネットを利用することで、時間や場所を問わず、情報を収集・発信できてしまう。ネット世代はこのことに慣れてしまっている。物心ついたときから、発達したインターネット環境に囲まれていたからだろう。人から情報を得て、人に情報を伝えるのではなく、メディアでそれらを済ましてしまっている。

極論を言ってしまうと、情報を収集・発信を行えるインターネットメディアさえあれば、

外に出ること、人に会う必要はないのかもしれない。少なからず、そのことはネット世代に表れているのではないか。18世紀のように比べると、外に出て情報を得ることは少なくなっているのは確かであろう。人との関わりは近い存在がほとんどなっていることで、やはり18世紀に比べると人間関係は狭い。セネットか唱えるように現代人、特にネット世代は公的領域よりも私的領域を求めているのかもしれない。

しかし、現代のインターネット技術の発達は外の世界とのつながりを可能にしている。web上で全世界の人々と双方向のコミュニケーションを可能にした。mixi、twitterやFacebookのようなSNSサイトでのコミュニケーションは盛んに行われている。もちろん、友人との交流を主流として利用している者もいるが、友人以外の外の世界の人物と接触する機会は拡大している。実際に、SNSサイト上では趣味を共通とした人物と出会い、交流を持つ者やtwitterや掲示板では社会事象や企業の商品などについて、互いを知らない物同士での議論が行われている。「公共性の喪失」が出版された1991年に比べて、現代人の人間関係の領域は拡大しているといえるのではないだろうか。

ネット、SNSの普及は外の世界とのコミュニケーション機会の増幅をもたらした。それは、今まで面識のなかった人に自分のことを知ってもらえるようになった。ネットを介して人々は自らの紹介や主張を世界の人々に発信している。Youtubeやニコニコ動画では自らのギター演奏、ネット上の動画を再構成したものを作品として投稿している。「自分はこういう人物なのだ」と表現しているところだろう。公共空間（リアルな空間）で自分と他人との差異を確認し自身を確かめる18世紀と比べて、現代では、ネット世界（バーチャル空間）で「個人」を不特定多数の人に主張することによって、自分自身の存在を確かめているのではないだろうか。

「個人」に重きを置いているのが現代なのである。「私的領域」を大切にし、確保、拡大することに走っている。インターネットにおいて個人の開示をすべて済ますことができる。よって、リアルな世界での人間関係は薄れてしまっている。インターネットの発達は、他人とのつながり拡大をさせたが、それは「個人」を押し付ける相手が増えただけである。